

# 雲仙岳と歴史・伝承①

## ●雲仙岳の立地と山容～縄文時代から古代～

雲仙岳そびえる島原半島は、西は外洋の東シナ海に面し、東は九州各方面へのアクセスルートである有明海に面した立地、そして三方を海に囲まれて高さ以上に立派に見える急峻な山容を背景に、古来、様々な海外文化がいち早く到来し、花開きました。島原半島は、国内でも最も早く（縄文晩期）稲作が大陸から導入された地域のひとつとされ、それを示す原山遺跡（農村公園）や山ノ寺遺跡等があります。仏教も同じく大陸伝来ですが、名高い僧・行基によって大宝元年（701年）、温泉山満明寺が雲仙地獄のほとりに開かれ、天皇の勅願所として、その約100年後に開山された比叡山・高野山とともに“天下の三山”と称されました。また、中国から日本に渡来する船にとっては、一番初めに見える高い山として渡海目標とされ、“日本山”とも呼ばれました。

この満明寺の沿革を記した「温泉山縁起」には、古事記・日本書紀に登場する“天孫降臨”にまつわる興味深い伝承が記されています。天孫降臨とは、天照大神の孫（天孫）の瓊瓊杵尊が天から地へ降臨したという神話で、降臨地としては日向国（宮崎県）の高千穂峽や高千穂峰が有力視されていますが、上記の伝承では瓊瓊杵尊は島原半島にて誕生し、その後に加意之呂（神代、当時の半島の中心地）から八代を経て日向国に向かった、というのです。他方、その八代の妙見宮（八代神社）には、古代に中国東岸部の寧波（一説には朝鮮半島南西部の百濟とも）から妙見神が亀蛇に乗って海を越えて渡来し、一時期滞在した、という伝承があり、天草西岸に妙見浦、島原半島には妙見岳という地名があります。天孫降臨が大陸の高度な技術をもった集団（神）の日本への渡来を表現しているとするれば、上記2つの伝承は、古代の渡来人集団が東シナ海→天草→島原半島→八代という海上ルートで渡ってきた大きな流れを、それぞれ異なる形で伝えているものと言えるでしょう。



満明寺の本尊については、高麗（高句麗）から4人の王女が飛来し、阿蘇大明神の奨めで瓊瓊杵尊が去った跡地（雲仙岳）に鎮座し、四面大菩薩となったと伝承されています。その雲仙岳は、713年編纂の肥前国風土記には“高来峰”として登場しますが、全国に点在する“高来”地名の多くは高麗からの渡来にまつわる名とされます。



昭和2年頃の満明寺



九州三大祭の八代妙見祭  
(左上は亀蛇)

以上の諸伝承は、古代の雲仙岳・島原半島が、朝鮮半島や中国と並々ならぬ深い関係で結ばれていたことを物語っています。

# 雲仙岳と歴史・伝承②



## ●雲仙岳の立地と山容～古代から中世～

日本の山岳信仰は、仏教と神道の両方を取り込んだ“修験道”<sup>しゆげんどう</sup>の形で展開されました。温泉山満明寺が仏教的に四面大菩薩を本尊としたのに合わせるように、神道的には温泉神社が温泉四面神を祭神としていました。高麗の4王女飛来伝承を背景に、身一つに面（顔）四つとされた温泉四面神は、一説には普賢岳（中の峰）を中心に4つの峰が取り巻いていた当時の雲仙岳主峰群の山容と関連性があるとも言います。温泉神社は満明寺が開かれた頃に創祀され、同時に山麓の4箇所（諫早・吾妻・千々石・有家）に分社が置かれました。山麓の集落にて祈願ができるよう、分社はその後増やされて、現在でも半島内に17分社が残っています。

実はこの温泉四面神、九州島そのものを表す神とされているのです。古事記において、筑紫島（九州島）には四つの面（地域）があるとされ、各地域を表す4柱（後に5柱とされた）の神々の名が記されており、その神々が温泉神社に祀られています。これは、雲仙岳・島原半島が九州島の（精神的な）中心地であった時代があったことを示唆しています。その後、中世に入って13世紀初頭、モンゴル（元）が九州に攻めてきた元寇の際、温泉四面神が戦場に現れ、元軍の一身三面の勇士（神）を追撃したとの伝説があり、弘安4年（1281年）には九州の総鎮守とされ、九州各地の武将の崇敬を集めたと言います。九州各地から遠望でき、九州島と同様に“四面”の物語のある雲仙岳は、いつしか九州島のシンボルとなっていたと言えるでしょう。



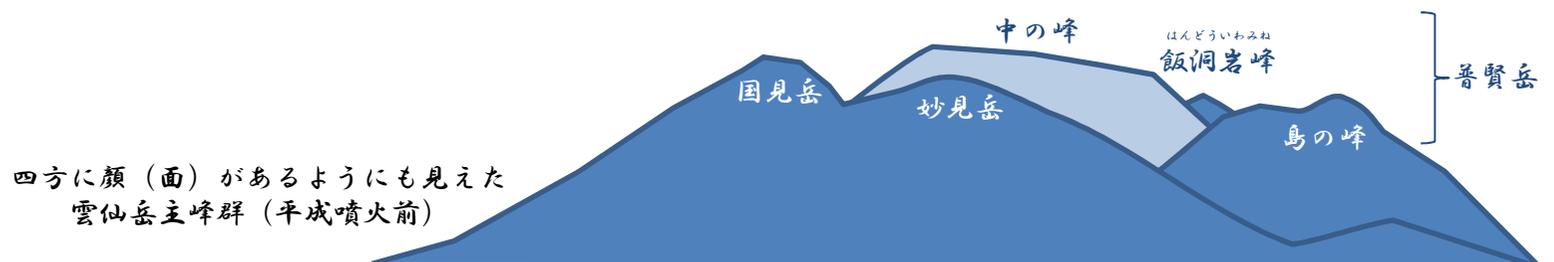
温泉神社（本宮↑と有家分社↓）



現在、全国第2位の生産量を誇る島原半島の素麺は、中世より地域産品となっていたようで、島原藩主（有馬家）から江戸幕府への献上品に含まれていました。次項で紹介する島原・天草一揆の後に瀬戸内の小豆島から伝来したとの説もありますが、それ以前に中国南東部（福建省）から伝来したとの説が有力視されています。当地の手延べ製法の工程・道具・器具が、小豆島とは異なり、福建省の線麺と同じであるとの調査結果があり、福建省から島原半島に渡って来た技術者によって直接伝えられた可能性が指摘されています。雲仙岳からの湧水、有明海の塩、肥沃な山麓で生産される小麦、雲仙岳から吹き下ろす乾燥した風が、名産・島原素麺を生み出しました。



島原素麺



# 雲仙岳と歴史・伝承③

## ●雲仙岳の立地と山容～中世から近世～

中世の戦国時代には、スペインやポルトガルの南蛮船が九州に来航するようになり、キリスト教をはじめとする南蛮文化が伝来しました。中国東岸を經由して来航する南蛮船がアクセスしやすい立地を活かし、島原領主の有馬氏はキリスト教をいち早く受容し、半島南端の口之津港を開港して南蛮貿易を行い、南蛮文化を積極的に取り入れました。永禄6年(1563年)、イエズス会による半島内でのキリスト教の布教が始まり、天正8年(1580年)には領主・有馬晴信が洗礼を受け(教名:ドン・プロタジオ)、キリシタン大名となりました。日野江城の下にはセナリヨ(Seminario、中等教育機関)が創設され、ラテン語、ポルトガル語、日本語や古典の他、音楽、美術、地理学、体育等、当時の最先端の教育が行われ、有馬セナリヨの1期生から選ばれた4名の少年が日本を代表してヨーロッパに派遣され(天正遣欧少年使節、天正10～18年)、ローマ教皇に日本での布教の成果を示しました。

他方、全国から多くの修行者が訪れていた満明寺・温泉神社の山岳信仰は、キリスト教布教上の大きな障害要因と見なされ、洗礼直後の有馬晴信によって大小40以上の寺社が徹底的に破壊されました。現在でも、雲仙地獄一帯には“首なし地蔵”が多く見られます。雲仙地獄は当時、硫黄の鉱山と見なされ、イエズス会は領主に雲仙地獄の寄進を求め、領主も内諾していたとされますが、天正12年に攻めてきた佐賀の龍造寺氏を打ち破るのに薩摩の島津氏の援軍を得た結果、敬虔な信徒である島津氏の山岳信仰復興の意向に配慮せざるを得なくなり、代わりに長崎の浦上村をイエズス会に寄進したとされています。

キリスト教の布教は、九州をはじめ全国に展開されていきましたが、次第にスペイン・ポルトガルの世界征服戦略の先遣隊として見なされるようになり、天正15年には豊臣秀吉が伴天連(宣教師)追放令を、慶長18年(1613年)には徳川家康が伴天連追放文(禁教令)を發出し、厳しい弾圧が始まりました。長崎奉行は、信徒摘発用に踏絵を考案し、信徒に改宗を迫る拷問には雲仙地獄のお湯を用いた“地獄責め”を行い、多くの殉教者が出ました。有馬氏の日向国への転封(慶長19年)、代わりに入って来た松倉氏による厳しい年貢の取り立てや弾圧により、島原藩内の浪人・民衆の反感は高まり、やがて世に言う“島原・天草一揆”へと突き進んでいきました。



殉教記念碑



大陸からの窓口位置する雲仙岳・島原半島は、古代より全国に知られた一大霊山でしたが、南蛮船の来航を機に衰退し、今度は南蛮文化が花開いてキリスト教布教の一大拠点となり、キリスト教弾圧が始まれば弾圧の一大拠点になるという、全国でもまれに見る激動の歴史の舞台となりました。



400年前のクリスマスを再現するFestivitas Natalis

# 雲仙岳と歴史・伝承④

## ●雲仙岳の立地と山容～近世から近代～

キリスト教徒の弾圧や厳しい年貢の取り立てが行われた島原半島・天草諸島では、領主への反感が次第に高まり、両地域の間に位置する湯島（談合島）において一揆の計画談合が行われ、寛永14年（1637年）10月、ついに両地域の民衆が蜂起し、「**島原天草一揆**」が勃発しました。天草四郎時貞を総大将とする一揆軍は、半島内の各集落に参加を呼びかけ、千々石断層より南側、半島の2/3はほとんどの集落が参加することとなり、廃城となっていた原城（有馬氏時代の支城）を拠点に領主と戦いました。衝撃を受けた徳川幕府は約12万の幕府軍を派遣し、一揆軍は原城に籠城して善戦しましたが、翌年2月に鎮圧され、籠城した**約37000人はほぼ全滅**となりました。



雲仙岳と原城跡  
(お城は一揆まつりの際の一夜城)



ここに、島原半島中南部と天草諸島の一部に**蛮人地帯**が現れるという史上空前の事態が発生し、幕府は九州を中心に全国の諸藩にノルマを課して住民を集めました。全国各地から文化風習を伴って入植が行われ、**多様な文化がモザイク状に分布**する現在の島原半島の風土が形成されました。その後、幕府は鎖国政策をとり、貿易港を長崎出島に限定しましたが、出島から入国したシーボルト等は、**一番近くの立派な山岳である雲仙岳**に余暇で訪れ、その魅力を書物にて紹介し、海外で知られるようになりました（寛政年間の眉山崩壊についても記録あり）。

明治に入って開国され、工業と貿易が推進されるようになった頃、三池炭鉱が開発されましたが、干潟で大型船が入れない三池からの石炭輸出の継港として**有明海の入口の口之津港**が選ばれ、明治42年（1909年）の三池港の完成まで、多くの輸出入船で賑わいました。その陰で“からゆきさん”の歴史も刻まれ、昭和初期まで続きました。



日華連絡船



明治以降、ヨーロッパを中心に雲仙岳に余暇で訪れる海外客が増え、大正12年（1923年）の日華連絡船の開通と相まって、特に**上海駐在の外交関係者にとってアクセスしやすい避暑地**として人気を博し、雲仙温泉街は海外文化を積極的に受け入れながら、**日本初の海外向けリゾート地**として発展しました。



雲仙岳と雲仙温泉街

古代より、九州、全国さらには世界の熱い視線を浴び続けてきた島原半島の歴史は、**雲仙岳の立地と山容**を背景としたものであり、国立公園第1号、世界ジオパーク第1号につながりました。当地で展開されてきた**激動の歴史ドラマ**を探訪してみませんか？

# 雲仙岳と教育

## ●学校の校歌に登場する雲仙岳

学校の校歌には、生徒に郷土の自然の魅力を伝え、その雄大さや美しさを精神的な成長目標として掲げる、という側面があります。吉岡庭二郎氏（元島原市長）の調査をきっかけに、島原半島内の全小中学校の校歌を調査した結果、以下の通りでした。

- ・全52小学校のうち46校、全20中学校のうち19校の校歌に雲仙岳を意味する文言が登場。
- ・3市の小学校の内訳： 島原市…9校中9校、雲仙市…20校中19校、南島原市…23校中18校
- ・地域によって、眉山や吾妻岳、高岩山、富津岳が登場。
- ・全52小学校のうち51校、全20中学校のうち19校の校歌に有明海や橘湾を意味する文言が登場。

平成27年  
3月時点

雲仙市の比率の高さはもちろんですが、島原市は100%、南島原市は78%と予想以上に高く、学校教育において雲仙岳、そして海と山が織り成す水陸の景観美が重要視されてきた実態が明らかとなりました。

### 島原市の例

- 第一小学校  
前に筑紫の海清らかに  
後に温泉（みゆ）の山高く立ち・・・
- 第三小学校  
・・・よばばこたえん眉山の尊き姿・・・  
しらぬ火燃ゆる有明の海を・・・
- 高野小学校  
雲仙のたかねは晴れて清らかに・・・  
有明の沖のかもめのあいよりて・・・

### 雲仙市の例

- 多比良小学校  
白雲あそぶ雲仙岳 碧波よする有明湾・・・
- 大塚小学校  
吾妻岳なだらにはせてみはるかす・・・  
有明の朝日を浴びて遠浅の・・・
- 雲仙小学校  
あした普賢の雲にみて・・・  
夕べ麓の海のぞみ・・・
- 南串第一小学校  
・・・雲仙の裾ひろがりて  
千々石の海は青く澄む・・・

### 南島原市の例

- 大野木場小学校  
・・・有明の海 潮は満ちて・・・  
・・・理想は高く 普賢の嶺・・・
- 龍石小学校  
朝日輝く雲仙岳の・・・  
白雲うつる有明海の・・・  
真澄みに光る高岩山の・・・
- 野田小学校  
仰ぐ雲仙 山紫に・・・  
雲か山かの天草灘に・・・

さらに調査を進めたところ、長崎県内の長崎市、諫早市、佐賀県の白石町、福岡県の柳川市、大牟田市、熊本県の荒尾市、長洲町、玉名市、熊本市、八代市、宇土市、天草市等の小中学校の校歌にも登場し、対岸各地域の“故郷の風景”となっていることが判明しました。

# 雲仙岳と文化財

## ●文化財としての雲仙岳

島原半島内には数多くの文化財が存在していますが、雲仙岳を対象とした国指定文化財に限定すれば、特別名勝として「温泉岳」天然記念物として「地獄地帯シロドウダン群落」「野岳イヌツゲ群落」「普賢岳紅葉樹林」「原生沼沼野植物群落」「池の原ミヤマキリシマ群落」「平成新山」が指定されています。このうち、特別名勝（風致景観がすぐれ我が国にとって芸術上または観賞上の価値が特に高いもの）に指定されている山岳は、実は全国でも富士山と雲仙岳（温泉岳）のみです。

### 富士山と雲仙岳の共通点

- ・周辺の4以上の県から立派な山体全体を鑑賞できる。
- ・霊峰として古くから崇拝され、山麓地域を越えて広い地域の方々の精神的支柱となってきた。
- ・有史以降も活発な噴火活動を繰り返してきている。  
（これら全てを満たす火山は国内でもまれ）



江戸時代の世界的な浮世絵師・葛飾北斎は、富士山に魅了され、当時の風物や人々の営みを交えて富士山を様々な方角から描いた作品集「富嶽三十六景」や「富嶽百景」を発表しました。この「富嶽百景」になぞらえ、「島原半島の魅力～雲仙岳百景～フォトコンテスト」（平成26年度、国立公園「雲仙」指定80周年及び島原半島世界ジオパーク認定5周年記念事業実行委員会）を実施したところ、長崎県内はもちろん、佐賀県、福岡県、熊本県、鹿児島県からも眺望写真の応募があり、「西九州のランドマーク」であることが確認できました。（※本冊子内でも作品を一部掲載）

雲仙岳のこのような県を越えた奥深い魅力にいち早く気づき、80年前に情報発信されたのが、長崎県選出の衆議院議員：橋本喜造氏でした。氏は、国立公園指定を機に執筆した「国立公園 雲仙大観」の中で、江戸時代以降の雲仙岳を題材にした漢詩や歌、絵画等を幅広く収録・紹介した上で、雲仙岳が遠景・近景の両面で優れ、東西南北に異なる表情を見せ、佐賀県（佐賀城）、福岡県（高良山）、熊本県（阿蘇、八代の日奈久温泉、天草諸島など）から眺望できることを紹介しました。国立公園の指定関係者が編纂した「日本の国立公園」（昭和9年発行）は、雲仙岳を「西九州に於ける水陸遊覧系統のセンター」であると記していますが、その趣旨を深く理解し、美辞麗句を尽くして雲仙岳の「富士山に負けない魅力」を力説された氏の文章には、現代にも通用する幅広い視野と先見性があったと言えるでしょう。



国立公園指定を機に建設され、氏が経営を任された雲仙観光ホテル（国の登録有形文化財）

# 雲仙岳と阿蘇山①

## ●雲仙岳と阿蘇山の古代からのつながり

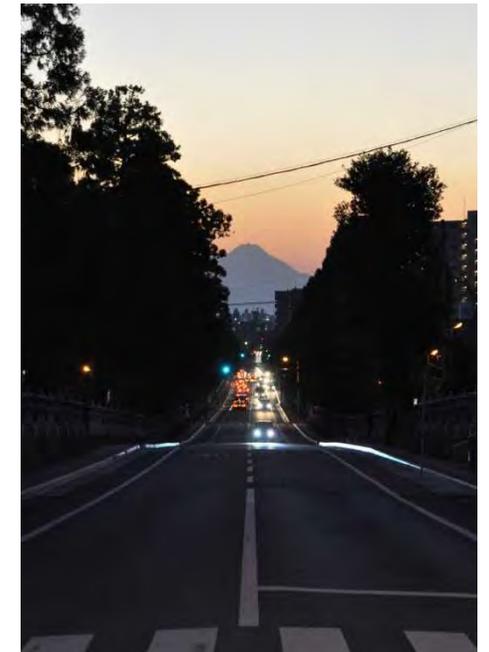
現代、雲仙岳と阿蘇山のつながりが話題とされることはほとんどありませんが、実は古代には並々ならぬ深い関係があったことが神社仏閣の配置から読み取れます。雲仙岳・金峰山・阿蘇山（高岳）は同じ火山帯に属し、東西にほぼ一直線上に並んでいます。そのラインを軸に雲仙岳と阿蘇山を大三角形で結ぶような配置で、古代創建の神社仏閣が並んでいます。これは、有明海の東西にまたがる古代の肥（火）の国において、西（肥前）にそびえる雲仙岳と東（肥後）にそびえる阿蘇山が2大火山として重要視され、両山の位置関係をベースに国づくりが進められていったことを示唆しています。 （ご参考 ⇒ <http://tizudesiru.exblog.jp/i51/>）



- 自然のライン（地学的に形成されたジオライン）
- 人為的なライン（神社仏閣の配置で形成されたライン）



阿蘇草千里から望む金峰山・雲仙岳



熊本市最古の健軍神社の参道  
約1.2kmの参道（八丁馬場）の  
先に、雲仙岳が正面に現れる。

# 雲仙岳と阿蘇山②

## ●雲仙岳・阿蘇山と有明海

時代をもっとさかのぼれば、雲仙岳と阿蘇山のさらなるつながりが見えてきます。雲仙岳と阿蘇山には含まれた有明海には、現在日本一の面積を誇る広大な干潟が広がっていますが、これは大量の土砂を運び込む多くの流入河川、波静かな奥の深い入江などの条件が整っているためです。有明海沿岸には筑後川や白川をはじめとする多くの一級河川が流れ込みますが、実は、約30万～9万年前に阿蘇山が巨大噴火した際に九州北部全体をカバーした噴出物を運び込んでいるのです。その大量の土砂がなぜ外洋に流れ出さないかと言えば、雲仙岳・島原半島が存在するためです。もしも約50万年前に雲仙岳が活動を開始せず、小さな火山島のままで島原半島になっていなかったなら、外洋の波が直接有明海に打ち寄せて、大量の土砂が外洋に流れ出したことでしょう。有明海の広大な干潟は、阿蘇山と雲仙岳の“阿・雲の呼吸”とも言うべきコラボによって成立しているのです。



荒尾干潟



宇土の干潟



もしも雲仙岳が存在しなかったなら・・・



吉野ヶ里からの雲仙岳

### コラム：吉野ヶ里遺跡

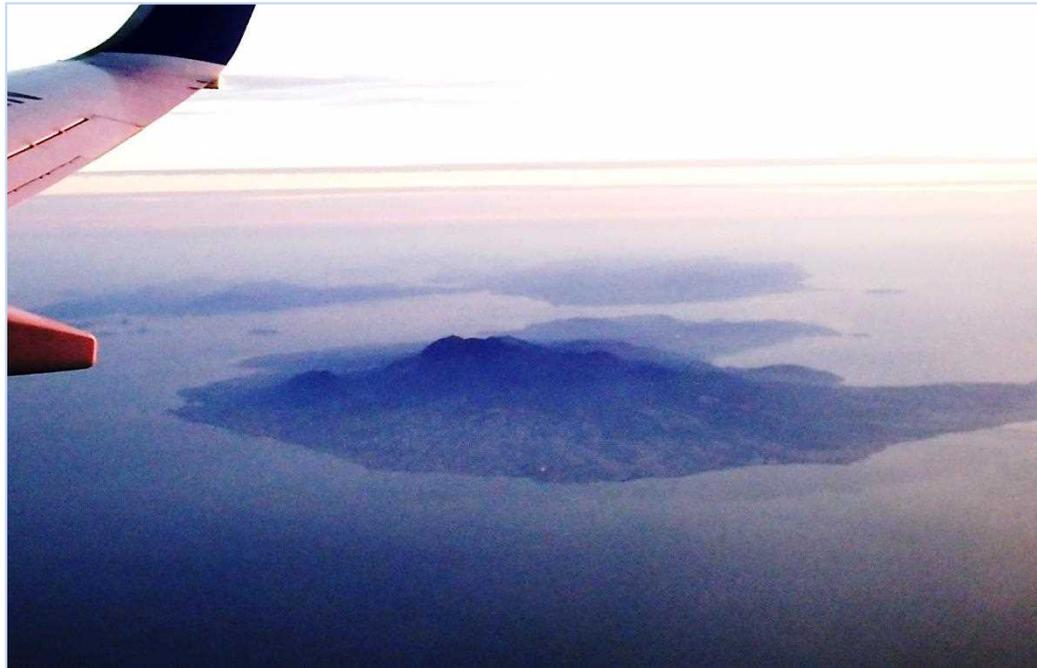
佐賀県内陸部にある吉野ヶ里は、古代には有明海沿岸にあり、その後の干拓で内陸部となりました。実は、吉野ヶ里遺跡の建物配置の中心線は、雲仙岳を向いています。古代の人は、有明海の干潟越しに雲仙岳を眺めながら、町づくりを進めていったと考えられています。

# 雲仙岳と天草諸島

## ●雲仙天草国立公園のパートナー

雲仙岳そびえる島原半島と大小約120の島々から成る天草諸島は、手を結び合うように有明海の入口を構成し、東シナ海と有明海をつなぐ同様の立地から、有史以来、多くの歴史を共有して来ました。縄文時代に国内でいち早く始まった稲作、みそ五郎伝説、妙見信仰、後に温泉山満明寺を雲仙岳中腹に開基することとなる僧行基が天草から雲仙岳を眺望して自らの修行の場と決めた逸話、中世のキリスト教の伝来・布教、キリスト教弾圧、談合島（湯島）における一揆の計画談合、島原・天草一揆、その後の無人地帯への諸藩からの入植、江戸時代末期以降の“からゆきさん”の歴史、大正時代に伝わって独自の進化を遂げた“ちゃんぽん”など、永く歴史を共に歩んで来たと言えます。

昭和9年、雲仙地域が国立公園に指定される際には、天草地域を含めるよう推薦する専門家の声も上がり、戦後の昭和31年、ようやく天草地域の追加指定が実現し、「雲仙天草国立公園」となりました。有明海・東シナ海と雲仙岳・天草諸島が織り成す“水陸の大展望”は、両地域の歴史・文化、地形を活かした棚田・棚畑の景観を織り込んで、訪れた方の心を捉えることでしよう。



手を結び合うような、手前の雲仙岳・島原半島と奥の天草諸島

# 雲仙岳を楽しむ

## ●雲仙岳を楽しむ国立公園とジオパーク

本誌でご紹介してきたように、“雲仙岳の火山活動の賜物”という意味で国立公園とジオパークは一体です。

国立公園の内外を含めた山～里(町)～海のパノラマの中で好みのテーマ (食/温泉/360度景観/歴史等) に沿って島原半島内の興味スポット (ジオサイト) を探索いただければ、必ずやお客様ならではの様々な半島周遊ルートが組むことができるでしょう。

半島を周遊される中で、雲仙岳のもつ“秘めたるパワー”をお楽しみいただければ幸いです。



0m～1483mの  
水陸の大展望



# 参考

# 80年前の地元新聞記事①

## ●雲仙国立公園の指定内定まで

(ご参考 ⇒ 鳥原の郷土新聞

<http://www.city.shimabara.lg.jp/section/shakyo/kyodoshinbun/index.html>)

鳥原町をリーダーとする旧南高来郡（鳥原半島）の全町村、長崎市、長崎県を挙げての指定運動が展開され、鳥原半島全体を国立公園に指定しようとしていた様子や、一時期は落選の危機にあった状況が、地元新聞の記事見出しから垣間見られます。

発行年月日	新聞名	見出し	
昭和5年 (1930年)	6月 23日	大鳥原新聞 雲仙国立公園指定申請	
	7月	6日	鳥原新聞 国立公園の指定は 大阿蘇か雲仙か 長崎市では期成同盟会を組織し 市民大会を開き猛運動 雲仙国立公園促進の南高期成同盟会 町村長会議で組織成る いよいよ猛運動開始 陳情委員三名上京
		8日	〃 熊本でも猛運動 阿蘇国立公園実現に
		13日	〃 雲仙国立公園設置に (鳥原) 町民大会を開く 十四日夜 大手広場で 宣言決議をして氣勢を揚ぐる
		16日	〃 雲仙滞在外人 安達内相に陳情
	18日	〃 水の仙郷 諏訪公園一帯 雲仙公園地域に編入? 地元の熱烈な希望 上海外人も (国立公園指定) 推薦 内務大臣に電報	
	8月	16日	〃 秩父ヶ浦公園で開く国際水泳大会 鳥原秩父ヶ浦駅間に三十分毎に臨時列車運転 雲仙滞泊の外人多数参加せん
		30日	〃 阿蘇を中心に別府、耶馬、日田を含む一大国立公園計画
	11月 8日	〃 雲仙公園の強味は海の展望 藤村義朗男の推奨	
昭和6年 (1931年)	3月 23日	大鳥原新聞 一地域の小規模から 西日本大国立公園へ 九州横断国際観光路大幹線の設定 鳥原鉄道庶務課長 松本龍之郎氏談	
	10月 20日	鳥原新聞 鳥原半島全部 国立公園に 指定方を極力陳情す	
昭和7年 (1932年)	4月 12日	鳥原新聞 国立公園に入選か否か運命の鍵を握る 調査委員一行の視察 雲仙はどうなる!	
	8月	14日	〃 九州の国立公園は阿蘇と霧島が決定
		17日	〃 国立公園指定雲仙望み薄
	29日	大鳥原新聞 雲仙国立公園問題に悲観は大禁物 最後の五分間までもと 池田県議談	
	10月	2日	鳥原新聞 雲仙を中心とする鳥原半島の国立公園
		4日	〃 郡民の熱望遂に達せられん 雲仙岳国立公園特別委員会で入選す
		9日	〃 吾が雲仙岳愈々 (いよいよ) 国立公園に決定 (8日に内定決定)
		10日	〃 国立公園運動の歴史 待望実に二十一年 遂に実現す
		12日	〃 雲仙国立公園大衆的に祝賀 気分をあふる長崎と地元で祝賀会 夜は提灯行列
		17日	大鳥原新聞 雲仙国立公園の祝賀会を盛大に挙行 二十一、二の両日長崎市で各種の催し 雲仙では二十三日・南高各町村が協賛
		22日	鳥原新聞 鳥原郷土史料展珍資料多数出品 雲仙国立公園決定記念の催し
23日	〃 雲仙国立を機に長崎を遊覧都市へ		

# 参考

# 80年前の地元新聞記事②

## ●雲仙国立公園の正式指定まで

国立公園の指定内定以降は、どこまでを公園区域に入れるか、大きく揺れた様子が垣間見られます。地元では雲仙岳の中腹以上と風光明媚な海岸部（原城趾や富津等）を区域に含めようとするも、飛地のないシンプルな計画としたい政府の意向で海岸部は外され、専門家から評価の高かった対岸の天草も編入が保留され、雲仙岳中腹以上のみの区域指定でスタートした様子が分かります。

発行年月日		新聞名	見出し
昭和8年(1933年)	1月	15日	鳥原新聞 国立公園と牧野関係 県当局と打合せ
		17日	〃 牧野の殆ど全部 国立公園地区に編入されん 防畜設備費は国、県の助成に待つ方針
		25日	〃 西郷村岩戸神社境内を国立公園地区に編入請願
		26日	大鳥原新聞 福岡久留米から雲仙遊覧に九鉄がコースに着眼 一新航路を計画す
		27日	〃 烏兔神社を国立公園地区に 土黒村から当局へ申請
	2月	2日	鳥原新聞 原城趾も雲仙公園に編入 県が力瘤を入れる
		3日	〃 雲仙国立公園 抗のうち初め 山岳部の実査に入る
		4日	〃 飛地の編入は今で決定しない
		5日	〃 雲仙国立公園の区域 相当ひろく (飛地のため) 原城趾は包括されまい 谷口県技師は語る
		7日	〃 天草の雲仙公園編入可能性は充分
		14日	〃 西郷岩戸、土黒烏兔両神社一帯 国立公園区域に編入
		15日	〃 小濱と千々石入口に南串山割石原も編入
		19日	大鳥原新聞 多比良の仙境・・・魚洗川 国立公園地域に編入さる
		25日	〃 大観賞すべし天草の風光 雲仙国立公園天草編入問題で実地視察中の田村博士 天草を激賞
		3月	4日
	4月	9日	大鳥原新聞 飛地を保留し抗打る 雲仙国立公園関係町村は二十二
		20日	〃 富津、木津半島国立公園に編入を陳情
		5月	10日
11月		23日	大鳥原新聞 雲仙国立公園区域に天草編入は必要 視察の上地元の希望に副(そ)ひたい 脇水博士は語る
12月		2日	〃 雲仙国立公園区域内に多良岳編入を希望
昭和9年(1934年)	2月	25日	鳥原毎日新聞 偶感 国立公園雲仙の指定と共に使命益々大 鳥鉄の過去と将来 仙水樓主人
	3月	17日	〃 本郡二十六個町村中の二十二個町村を国立公園地域に決定
		23日	〃 五十年後の鳥原半島は雲仙国立公園を中心に一大遊園地とならう 谷口県技師が専門的に考察
	9月	19日	〃 雲仙公園十六日正式に国立に指定さる 日本最初の国立公園として
	12月	15日	〃 輝く雲仙 挙県多年の願望 国立公園報告祭 温泉神社社頭にて盛大に行はる
			〃 ゴルフ場から仁田へ新道路 県営ホテル(観光ホテル)も成案
			〃 雲仙国立公園の世界的宣伝

# 参考

# 雲仙岳の80年前と現在

## ●風景今昔

昭和9年に雲仙国立公園が指定される前夜の昭和2年頃に撮影された写真を、現在の同様のアングルの写真と対比させて一部紹介します。当時の写真は雲仙お山の情報館所蔵です。



深江方面からの雲仙岳

仁田峠（移動用の籠）

諏訪の池からの雲仙岳

大叫喚地獄



雲仙ゴルフ場



絹笠山の測候所



(昭和7年)

国立公園指定祝賀パーティー

# 参考

# 島原半島周遊の情報拠点

## ●がまだすドームとビジターセンター

島原半島周遊のための情報拠点としては、ジオパークの中心拠点で半島全体の情報が得られる雲仙岳災害記念館（がまだすドーム）と国立公園のビジターセンター3館があります。



雲仙岳災害記念館  
ジオパークの全体的な情報をご紹介します。



雲仙お山の情報館  
雲仙岳の登山情報や  
半島北西部のジオサイトをご紹介します。



平成新山ネイチャーセンター  
平成新山等の自然情報や  
半島北東部のジオサイトをご紹介します。



雲仙諏訪の池ビジターセンター  
諏訪の池周辺の自然情報や  
半島南部のジオサイトをご紹介します。

### 【島原半島周遊を楽しむための情報】

- ・まるまる島原半島  
<http://www.shimakanren.com/>
- ・島原半島ジオパークHP  
<http://www.unzen-geopark.jp/>

ジオパーク入門用に、子供向けのジオパークマンガ“わくわく！島原半島探検隊”をご活用ください。上記施設やウェブページで入手可能です。（紙芝居版やプレゼン版もあります。）  
[http://kyushu.env.go.jp/pre\\_2014/0430a.html](http://kyushu.env.go.jp/pre_2014/0430a.html)



# 掲載イラスト・写真の提供元①

- P. 3 イラスト：吉田 初三郎氏 画  
(C) アソシエ地図の資料館
- P. 4 イラスト：鳥原半島ジオパーク協議会
- P. 5 イラスト：鳥原半島ジオパーク協議会
- P. 6 表：鳥原半島ジオパーク協議会
- P. 7 表：鳥原半島ジオパーク協議会  
写真：(4枝) 大河 憲二氏
- P. 8 イラスト：鳥原半島ジオパーク協議会
- P. 9 写真：(左上) 草野 俊彦氏\*  
(右上) 竹馬 朋宏氏\*  
(右下) 巽 信吾氏\*
- P. 10 写真：(左上) 小川 毅馬氏\*  
(左下) 草野 俊彦氏\*  
(右上) 巽 信吾氏\*  
(右下) 酒井 寛氏\*
- P. 11 地図：国土交通省雲仙復興事務所  
写真：(5) 草野 俊彦氏\*  
(6) 酒井 寛氏\*  
(7) 竹馬 朋宏氏\*

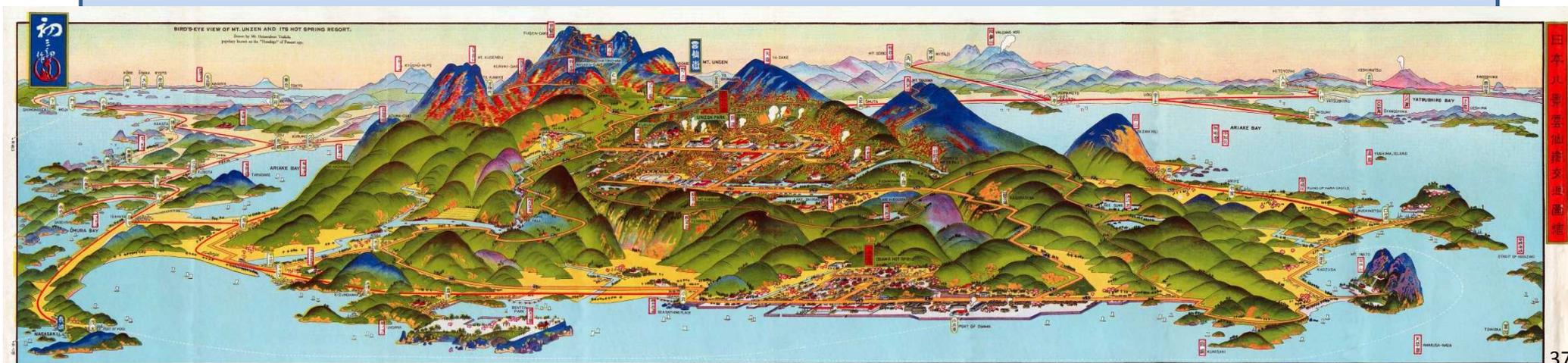
- P. 12 写真：(1) 瀧上 久男氏\*  
(2) 藤松 政晴氏\*  
(3) 川副 秀氏\*  
(4) 鶴田 須美子氏\*  
(5) 野田 純一氏\*  
(6) カール ジェンソン氏\*  
(7) 一ノ瀬 昭豊氏\*
- P. 13 写真：(2) 小川 麻子氏\*  
(3) 荒木 喜八郎氏\*  
(4) 藤松 政晴氏\*  
(6) 鶴田 須美子氏\*  
(7) 日當 國親氏\*  
(9) 片山 研吾氏\*  
(10) 小山 保則氏\*
- P. 14 地図：国土交通省雲仙復興事務所
- P. 15 写真：(中央) 一ノ瀬 昭豊氏\*  
(下) 瀧上 久男氏\*
- P. 16 イラスト：長崎県鳥原振興局山地災害復興課  
(“雲仙・普賢岳噴火災害と活山事業”)  
写真：(左下) 瀧上 久男氏\*  
(4) 瀧上 久男氏\*  
(5) 雲仙お山の情報館

# 掲載イラスト・写真の提供元②

P.17 地図 : 国土交通省雲仙復興事務所  
 写真 : (左上) 小浜温泉観光協会  
 P.18 写真 : (左下) 雲仙お山の情報館  
 (右下) 雲仙お山の情報館  
 P.19 写真 : (左上) 紫田 鹿吉氏\*  
 (左下) 木田 智氏\*  
 P.20 イラスト : 島原半島ジオパーク協議会  
 写真 : (左下) 菅 記博氏\*  
 P.21 地図 : 国土交通省雲仙復興事務所  
 P.22 写真 : (中央) 雲仙お山の情報館  
 P.23 写真 : (右上) 大河 憲二氏\*  
 P.25 地図 : 国土交通省雲仙復興事務所  
 写真 : (右上) 巽 信吾氏\*  
 (右中) 雲仙お山の情報館

P.28 写真 : (左) 鶴田 須美子氏\*  
 P.29 写真 : (左上) 竹下 将明氏\*  
 (左下) 野田 純一氏\*  
 (右上) 福田 敬氏  
 P.31 イラスト : 島原半島ジオパーク協議会  
 P.32 表 : “島原の郷土新聞”より作成  
 P.33 表 : “島原の郷土新聞”より作成  
 P.34 写真 : (上段) 雲仙お山の情報館  
 (下段) 雲仙お山の情報館  
 P.37 イラスト : 吉田 初三郎氏画  
 (C) アソシエ地図の資料館

※上記以外の写真は、環境省撮影。  
 ※\*の写真は、“島原半島の魅力～雲仙岳百景～  
 フォトコンテスト”の応募作品です。





フェリー（島原～熊本航路）からの雲仙岳夜景



阿蘇草千里からの雲仙岳夜景



環境省九州地方環境事務所  
平成28年3月発行